

## contents

- 活動フォトニュース ..... 2
- 新・コラム「Bravo」 ..... 3
- シリーズ この人に聞く 第15回  
下村靖樹さん  
〈ルワンダ孤児少女の成長〉  
..... 4
- 新・漫画  
「ユニセフってなあに？」 ..... 8

## 新しい年が幕を開けて

プロペラ機の窓から見える眼下の雲間に、その国は姿を現した。海のない内陸国・ラオスである。茶色の帯を蛇行させるメコン川。峰々が連なる岩山。2018年の11月末、ラオスの古都・ルアンパバーンの空港に降り立った。

「都市から遠く離れた村は貧しく、病気や感染症の影響を大きく受ける。そんな村に、ワクチンを届け続けて15年になります。」そう話すデン・シャヤソンさんの活動は、ユニセフの2018年・年次活動報告で知った。デンさんは、ユニセフの保健医療チームのスタッフだ。

山岳地帯の村へ向かった。街から車で約5時間。山道を走り、雲海を横目で見ることも。到着したのは84世帯、434人の少数民族が暮らすバンバイ村だった。村では、日本の国際ボランティア団体「エルセラーン1%クラブ」(石橋勝代表、大阪市北区)の寄付によって建設された小学校の開校式が行われていた。

「教育空白区の村に小学校ができました。教育は、子どもたちの生きる力

## 海のない国で考えた「生きる力」



ゾウ使いの少年たち (2018年12月=ラオス・ルアンパバーン郊外)

を培います」。村長のシエンティーさんは、こうあいさつした。

保健医療と教育は、子どもたちの「生きる力」を高めていくうえで、とりわけ重要だ。全校児童83人。子どもたちは、瞳を輝かせていた。下校すると、家事を手伝い、弟や妹の面倒を見る。自給自足の家も多い。大家族の絆がある。少数民族の垣根を超えた、共生社会もできている。

今はセピア色になった、日本の古き良き時代の家族のありようと重なる光景が、そこには存在する。ラオスは後発開発途上国、つまり最貧国の一つだ。しかし、日本では廃れつつある「人間の生活力」を強く感じた。

とはいえ、どんなに生活力があっても、子どもたちの可能性が狭められたままで、いいはずはない。一生、海を見なくていいはずはない。そっと目を閉じれば、宇宙のかなたにだって行ってしまう。そんな想像力を持った子どもたちの夢や可能性を実現する「生きる力」は、無限大なのだ。

15歳の働く少年に出会った。ゾウ

使いの仕事で、家計を助けている。

「ニッポン? 聞いたことがない……。でも、知りたい」。

ゾウ使いの少年が、大海原を漕ぎ出すときは来るのか。貧困や格差にあえぐ世界中の子どもたちの「知りたい」に応えていくユニセフの日々は、2019年も続いていく。猪突猛進ではなく、丁寧にしっかりと……。 (平田篤州)

## ラオス

日本の約63%の国土に約700万人が暮らす。仏教徒が60%。1日2ドル未満で暮らす貧困層は約420万人。識字率は青年(15歳-24歳)で89%。

